

# なのはと喧嘩中にフェイトさんにNTRれる話

梵尻

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

新婚なのさんと喧嘩した主人公が、フェイトそんにNTRれる話。主人公が！寝取られる話！（大事なことなので二回言いました）

♂の寝取られて需要あんの？

完結済みです

# 目次

なのはと喧嘩中にフエイトそんにNTR れる話	—	1
なのはと喧嘩中にフエイトそんにNTR れる話	2	19
なのはと喧嘩中にフエイトそんにNTR れる話	3	31
なのはと喧嘩中にフエイトそんにNTR れる話	4	40
なのはと喧嘩中にフエイトそんにNTR れる話	5 — a	54
なのはと喧嘩中にフエイトそんにNTR れる話	5 — b	64



# なのはと喧嘩中にフエイトそんにNTRれる話

「私、ケイくんのそういうところ嫌いだから」

「俺だってなのはのそういうところ嫌いだから」

「……」

「ふんっ！」

「くだらねえことで喧嘩しちやったな……」

——本当に、大したことのない事情で妻のなのはと喧嘩をしてしまったものだ。少しだけ自己嫌悪に陥る。

どちらが悪いかなんて、喧嘩をした段階で明確に存在しない。それでも俺にだって引け目はあるわけだから、なんとか仲直りをしようと謝罪の連絡をしている。しかし、返信はない。さらに、喧嘩を境に最近は大人数しくしていた彼女は、再び仕事の量を増やして接触を避けている節がある。

ヴィヴィオは早く仲直りして欲しいと頼んでいる。俺もなんとか機嫌を取ろうと奮闘しているのだが、どうやら今回の喧嘩が今まで溜まっていた鬱憤を爆発させる引き金

になってしまった。そして、タイミングの悪いことに、現在調査している事件の関係で、自分自身が夜型の生活を送るようになってしまったのだ。そのため、家の中でもなのはと顔を合わせる機会が減ってしまった。

こういう時は何をやってもうまくいかない。

「仕方ないとは言え、平日の昼間から1人で家でゴロゴロしてるのは気がひけるな……」

なのはは仕事、ヴィヴィオは学校。

1人で呆けている家というのはいつもより広く感じて、喧嘩している妻のことを思うとどうも居心地が悪かった。

「……買い物でもするか」

気分を紛らわせたいのと、少しだけ家から出たいのと、昼ごはんを用意しなければいけないのと。とにかく理由はいろいろあるけれど、買い物をするべく近所のスーパーに行くことにした。

何もしていないと余計に考えすぎてしまう。そんな性格なのだ。

スーパーで食材を買って久しぶりちよつくら料理でもしよう。こう見えても料理は大の得意技であるし、今日の夕飯を用意しておけばもしかしたらなのはの機嫌も治るかもしれない。

まあ、何もしないよりかは幾分かマシだろう。

（鶏ムネ肉、ちよー安かったな。この前作った梅ジャムがあるし、鶏胸肉の梅じそ巻きにしよう）

多少は買い込んだ重めのビニール袋を揺らしながら帰路を歩く。スーパーの効きすぎた冷房になれた体は、夏の暑さも地獄の業火に感じられる。それほど遠く無い自宅とスーパーの往復を歩くだけでも汗をかいてしまった。

煩わしいほどの蝉の声を聞きながら、食材があつまってしまいう前に家に帰ろうと歩みを早める。

「つて、あれ?」

自宅までほんの数メートルというところに差し掛かった。

暑い中を早歩きしたせいで、汗はびっしりだ。前髪がおでこに張り付くのがひどく不快に感じる。

「おーい、フェイトさんですよね」

こんな暑い中だと言うのに、もちろん汗もかいているのだろうけどこうも綺麗に街中に立っていたのはフェイトさんであった。暑い真夏の屋外とアンバランスな彼女を見ると、別世界のおとぎ話でも読んでいるような気分になる。

「なんだかこちらまで涼しく感じる。」

「あ、ケイ……………さん」

彼女のもとまで駆け足で近寄る。

すると、遠目から見た雰囲気からは想像できなかったほどに汗をかいている事に気がつく。

「あれ、顔赤いですよ」

そして、彼女の透き通るほど綺麗な真つ白な顔が今日は少しだけ赤くなっていた。

「今日暑いですからね。そうだ、折角なんで寄つてきますか？ フェイトさん調子悪そうですよ」

なのはの親友であるフェイトさん。実は俺にとつては、なのはと知り合う前からの知り合いである。というのも以前俺の上司であったことがあり、その縁もあつてか憧れの存在だ。

どうしてフェイトさんがこんな時間にここにいるのかは分からないが、見た感じでは私服だし、暑さにやられていているようだったので家に誘う。まったくもって他意はない。何なら折角の機会だ、なのはと仲のいいフェイトさんに喧嘩のことを相談できるかも知れない。

「でも、迷惑に……………」



「いやいやいや、全然、そんな事ないです。なんならフェイトさんには前一緒に働いた時に返せないほどの恩がありますから、お茶くらい出させて下さいよ」

「じゃあ、少しだけ」

「やった！」

久しぶりに会ったフェイトさん。

俺の元上司であり、俺にとつて憧れの人物。そしてなのはの親友。体調も優れなそうだし、我が家でもてなさなくては。

「何もなければ上がって下さい、といつても、なのはとヴィヴィオに会いによくきてくれますよね」

「今日は何十年に一度くらい暑いらしいですよ」

「そうだったんですか」

「毎年聞きますけどね」

ううむ。

久しぶりだし、職場の部下から親友の夫にクラスチェンジをしたとは言え、フェイトさんに敬語を使われるのはどうも変だ。

「と言うか、フェイトさん。敬語じゃなくていいですよ、昔みたいにあつて話して下さい」

いよ！ ちよつと寂しいですよ？」

「えと……うん、そうだね。そうする」

それにしてもフェイトさん、どうにも顔が赤い。そして、いつもより口数が少ない。前に一緒に働いていた時はよく俺に話しかけに来てくれたし、あの部隊で一番面倒を見てくれてたのに。なんだか、よそよそしい。

そういえば、いつからこんな感じになったんだろう。なのはと結婚した時？ いや、その時にはもうこんな感じだった気がする。それなら、もうちよつと前かな？

……いや、今はどちらでもいいや。

そんなことよりお腹が減った。こんな時間に外にいたフェイトさんも、昼ごはんを食べてないのではなからうか。

「そういえばお昼は食べたってますか？」

「いや、まだだよ」

「よし、じゃあ今から作りますんでちよつと待ってて下さいね」

パパッとできて、熱中症予防にもなる家にある食材でできる料理……。

「そうだ、フェイトさんって梅とか平気ですか？」

「梅？ 平気だよ。料理に使うの？」

「こちらを向きながら、疑問の言葉とともに小首を傾げる。

女性として、あまりにも魅力的すぎるその行動に少しだけどきりとしてしまう。

(まったく、既婚者のくせにアホか俺は。……まあ、今は喧嘩してるけど)

とはいえ仕方がない。

俺の妻は世界一可愛いと思っているが、今日の前にいる女性も超のつく美人なのだ。街中にいれば大抵の男が振り返るであろうレベルだ。

なんて、とりあえず昼メシを作らなければ。

お湯を沸かしながら食材を用意する。大したものではないんだけど。

「そういえばフェイトさん、今日はどうしたんですか？」

「少しだけ仕事が空いたから、なのはに会おうと思って来たんだけど、今は居ないんだね」

「そうですよね、最近また仕事増やしたみたいで……というか、なのはに連絡入れてなかったんですか？」

「最近、なのはが落ち込んでると言うか、機嫌が悪いみたいだったからちよつとしたサブライズで驚かそうと思って」

友人から見てもわかる程度になのはも落ち込んでいたのか。まあ機嫌が悪いとも言っているから一概にどうとは言えないけれども、仲直りしたいと言う気持ちはあるのかも知れない。どちらにせよ、いち早く仲直りするために頑張らなければ。

「でも、なんでなのは仕事増やしたんだろう」

ううむ。あまり触れられたくはない話題ではあるのだが、なのはの親友である彼女に相談をできるまたとない機会だ。

「それに、最近ちよつとぴりぴりしてるし……」

「あの一、それ、実は俺のせいなんです」

「え？ ケイクんのせいって、どう言うこと？」

「実は、なのはと喧嘩しちゃって……」

「——そ、そうなんだ、なんかいつも仲よかった2人が珍しいね」

フェイトさんが、少しだけ言葉を詰まらせる。どうしたんだろうか。俺たちの喧嘩がそんなに珍しかったのか。

「そうなんですよ、しかも長引いちゃって、なんとか仲直りしたいんですけど……」

「そうだよね……」

「そこで、いつもお世話になりっぱなしで申し訳ないんですけど、なのはと仲直りするために相談に乗ってもらっても良いですかね？」

それにしても、だんだんとフェイトさんの硬さが消えてきたはずなのに、またここになつて少しだけ、その対応に違和感を感じる。

嬉しいような、悲しいような、複雑な何かだ。

「——、うん、任せて！」

フェイトさんは少しの間の後に、満面の笑みと頼り甲斐のある強い言葉で返事を返してくれる。

……俺の考えすぎか。

こうしていると、昔一緒に仕事をしていた頃を思い出す。よく面倒を見てもらったし、本当にお世話になったものだ。

「よし、お昼出来ました。豚バラ肉の冷製梅パスタです！」

「わあ、美味しそう!! 本当に食べていいの？」

「当たり前ですよ。相談に乗っていただくお礼です。なんなら、最近昼は家にいるのでいつでも来てくれていいですよ。ご飯くらいは出しますから」

「……ありがとう」

フェイトさんはお礼を言うと、少し照れたような、それでいてどこかに憂いを感じさせるような表情でこちらを向く。

「その、ケイクんの手料理って、なんだか久しぶりだね。……嬉しい」

なんだ、これは。すげえ照れる。それと、言いようも無いもどかしさを感じる。

「たしかに久しぶりですね。三、四年振りくらい、でしたっけ」

俺が転勤をして、なのはと出会って一緒になったのが二年前の話だからちようどその

くらいであろうか。

「正確には三年九ヶ月と二十四日振りだと思うよ……。あ、でもこれは職場が変わる前に仕事で会った時の話で、私が勝手にケイクンを見かけた事ならいっぱいあるんだけどね。去年の結婚式の時は仕事で会いに行けなかったけど、仕方ないよね？　なんだろう、こうやってちゃんと2人きりで話せたのは最後の出勤日の3日前に一緒に飲みに行った時だったっけ——」

俺の中途半端な記憶に何かを刺激されたのか、フェイトさんは堰を切ったように突然喋り始める。すごい記憶力だな、と思う一方、失礼だとは思うのだが、少しだけ怖さというか不気味さというか、そのようなマイナス方向への感情を抱いてしまう。

「あの、フェイトさん！」

「ん？　どうしたの、ケイクン」

俺の呼びかけに、なんとか普通のフェイトさんに戻る。先程のように、捲し立てて喋るフェイトさんは初めて見た。

……正直、少しだけよくわからない恐怖を感じた。

「よ、よく覚えてくれてましたね、四年近くも前のことなのに」

その言葉にフェイトさんは頬を膨らませて、少しだけ怒ったそぶりを見せながら口を開く。

「うん、ケイくと会った記憶は全部すっかり覚えてるよ」

「は、はは……」

フェイトさんにしては珍しく、変な冗談だ。

とりあえず、この変な雰囲気はどうにかしなければ。そもそも俺がフェイトさんを家に上げてまで話をしたかった事は、俺となのはとの夫婦喧嘩の話だ。まずそれについて話さないよ。

「それより、俺となのはの喧嘩について聞いて下さいよ。この前なんですけど——」

それから、なのはの機嫌を直すアプローチをいくつか試した。そのどれもがうまくいかず、彼女とはいまだに喧嘩をしたままだ。

対して、フェイトさんとはそれはもう毎日のように会っていた。なのは仲直り作戦の立案や相談の相手、俺の昼飯を振る舞う相手としてもだ。

かれこれ二週間近くが経った。そんなある日、なのははヴィヴィオを連れてお泊りに行くという話になった。俺は明日朝から仕事であり、今晩は家で一人寂しく待っているしかない。食べてもらう相手もないと、なかなかご飯も作る気にならない。最近はお昼にフェイトさんが来てくれたおかげで、毎日のように楽しく料理をすることができた。

(まあ、たまには一人でゆっくりするのも悪くないかな)

なのはとはまだ喧嘩中とはいえ、最近は少しずつ冷戦状態が解除されつつある。春は意外にも近いように感じられる。ご飯を作って用意しておいたら、ありがとうと書かれた書き置きがあった。流石にもうそろそろ仲直りできそうだ。これもフェイトさんのおかげだな。

今日はもう面倒くさいしパスタだけ茹でてインスタントのソースをかけるだけでいいか。

などと考えている時に、家のインターホンが鳴った。

ネット通販も使っていないし、一体なんだろう。変なセールスだったら嫌だな、などと考えながらインターホンの液晶を除く。

(つて、え?)

画面に映っていたのは最近よく見る顔の先輩、フェイトさんだった。

(とりあえず、でないと)

こんな時間に来る彼女に、少しでも疑問を感じながらも応答のボタンを押す。

「フェイトさん、ですよね? どうしたんですかこんな時間に」

「あ、その。今日、なのははいないって聞いたから、いつもお昼ご飯を作ってもらってるお礼に私が作ろうかなって思ってた」



うーむ、正直な話嬉しいことには嬉しい。

だが、いつもと違い完全になのはもヴィヴィオもない俺一人の、尚且つ帰る予定もない日の夜の自宅。妻子持ちのこの身で、美人の独身女性をこんな時間に「なのはがないから」という理由で家にあげるのはいささか問題があるのではないだろうか。

そもそも普段から俺しかいない時に彼女を家にあげてる段階で今更とは思うのだが、今日は状況が状況なのだ。

それにフェイトさんはなのはの大親友であるし、俺にとっても憧れの先輩ってだけだ。そんな、過ちだとか引け目なんて感じる必要はない——、ってそれなら今上げてても問題ないのかな。

……問題ないよな。

というか、変に考えてしまった俺の方が失礼だしよほど不健全だ。

そもそもフェイトさんにその気は無いはずであるし、変に勘ぐりすぎた。

「ほんとですか!?! ありがとうございます、ちようど飯作るの面倒だなー、なんて考えてたところなんですよ。ささ、上がって下さい」

扉につけたベルの音が聞こえると、「おじゃまします」というフェイトさんの声も同時に聞こえてくる。出迎えなければと思い、リビングから玄関へと足を向ける。家に入ってきたフェイトさんは、スーパーのビニール袋を片手に新婚さんのようだった。

「急に押しかけちゃって、ごめんね」

「いえ、平気ですよ」

平謝りする彼女の姿は、いつもの平日よりもなぜか妖艶であった。

……先程から失礼なことを考えてしまっている自分に対して、嫌気を感じながらも、そんな自分を誤魔化すようにフェイトさんを台所へと連れて行く。

「まあ、知つてるとは思っただけ、ここが台所です。もしどこに何があるかわからなかったりしたらなんでも聞いてくださいね」

「うん、ありがとう」

「なんなら、俺も手伝いましょうか?」

「それじゃあ、お礼の意味がないから大丈夫。……そうだ、先にお風呂に入っても平気だよ」

「お言葉に甘えさせてもらいます」

フェイトさんがくる少し前にボタンを押したお風呂は、既に42度のお湯がたまっているはずだ。お客人にもてなされるのはいいどうも変な気持ちなのだが、相手の好意は受け取らないと逆に失礼だろう。

「料理は任せてね」

髪を後ろに括りながらエプロンをつける彼女の姿は、喧嘩をする前のなのはの姿を彷彿

佛とさせてなんとも言えない気分となる。そんな気分と、雰囲気には酔っているであろう自分を洗い流すためにも、一刻も早く風呂に入るべきなのだろう。

風呂から上がりリビングに向かう途中、ふつうに美味しそうな香りが漂ってきていた。フェイトさんが料理をするイメージはあまり持っていなかったのだが、これなら期待できそうだ。

「お風呂上がりました」

リビングのドアを引き中に入る。フェイトさんは一瞬だけびくりと身を揺らした、ような気がする。部屋の中は香ばしいトマトソースの香りで溢れていた。

「あ、早かったね。こっちももうそろそろ出来上がるから座ってて」

「わかりました」

リビングのテーブルにフォークを並べると、テレビのリモコンを手に椅子に座る。適当に番組をつけてみるが、どれも対して面白そうではなかった。

それでも、この時間に二人きりで卓を囲むのに少しだけ抵抗を感じたせい、無音状態を回避するために適当なところでチャンネルを探る手を止めた。コメディアンの冷めたジョークに観客が笑う。俺はその映像に興味があるかのように見つめふりをした。少しだけ自分が緊張しているのを感じた。

「おまたせ」

「いえ、全然待つてませんとも。ところでこれ、何ですか？」

玉ねぎ、なす、ズッキーニ、ベーコン。これらが真つ赤なトマトソースから美味しそうに顔をのぞかせている。

「これはね、ラタトウイユ。あとはグリルチキンと、パンもあるよ」

「なんかいつぱい作つてもらつてすみません。そんなにあるなら運びますよ、俺も」

「んー、座つてていいよ。本当に大丈夫だから」

「いや、でも……」

無理に立ち上がりとうとする俺の後ろに回ると、そつと肩に手を乗せて優しく椅子に押し返す。

首筋にこそばゆさを感じる。目を向けると、透き通るほどに綺麗な金色の髪の毛が束になって垂れていた。そこに気を取られているすきにフェイトさんの艶やかな唇が俺の耳元に運ばれて、優しく、ゆっくりと呟く。

「いいから、最近頑張つてたみたいだし、今日くらいはゆっくり、落ち着いてね」

ぞくぞく、と電気が駆け巡るように身体中に何かが駆け巡る。心臓も妙に高く脈打ち、俺の肩にある冷たいとも暖かいとも取れるフェイトさんの手がリアルに感じられた。

……耳は弱いんですって、前話しましたよね。

「ちよ、フェイトさん。やめ——」

「よし……飯にしよう！」

「あ、は、はい」

何事もなかったかのように颯爽とキッチンへ戻ると、手際よく作業を進める。フェイトさんって、家事できたんだ。正直言つてそんなイメージはなかったと言うと失礼だろうか。

目前には香ばしい匂いのグリルチキンとフランスパン、そしてフェイトさんが買ってきたであろうお高そうなワインが一つ用意される。

何も言わずにお互いのグラスにそのワインをトクトクと注ぐ。良いものなのだろう。フルーティーな香りが、ぎゅつと濃縮されたようになって鼻腔をくすぐる。

「ワインいけるクチだったよね？」

「はい、なんなら大好きですよワイン」

「そう、良かった」

あれ、フェイトさんに俺がワイン好きだった話はした事あるだろうか。

……というか、ワインを好きになったのって、フェイトさんと一緒にいた時じゃなくて、割とつい最近の気が——

「はい、それじゃ乾杯しよ」

「——そうですね」

まあどうだつて良いだろう。なのはあたりにも聞いたのだろう。

そんな事よりも、せっかく良いワインと、こんなにも美味しそうな夕ご飯を作つてくれたのだ。早く食べなければ失礼だ。

「それじゃあ」

「乾杯」

フェイトさんが振る舞つてくれた料理は、とてつもなく美味しかった。

かつてきてくれたワインもとても美味しくて、あけるのがもつたいないというのにつ  
いつい飲み干してしまった。

そうしてだんだんと心地よくなって、なんだかふわふわしてきて。

そうして俺はたおれるようにねむりについた。

「ごめんね、なのは。ケイ。でも、でも君達だつて悪いんだよ？ そうやって隙を見せ  
て、信頼しきつて。そんな風にされたら諦められないよ、だから、もう、私は謝らない  
からね」

## なのはと喧嘩中にフェイトそんにNTRれる話 2

落ち込んだ親友、高町なのはを見て、純粹に慰めてあげよう。そう思ったのがきつかけだった。

それは本当の話だ。

だけど、連絡もせずには直接家に行ったのは、いつもの事ではあるのだけど、何かが起こるわけでは無いと思いつつも、彼と会える可能性を信じていなかったといえれば嘘になる。

だから、彼が私を何の躊躇もなく家にあげたのも、喧嘩をしていると言う話をしたのも。

全部、偶々が重なっただけのものだとわかっているのだけれども、それでもずるいと思ってしまう。

「いつでも来ていいですよ」

彼はそう言った。

その言葉に甘え続けて行けば行くほど、彼のことがより好きになってしまった。何度もやめようとした。

それでも、もう、取り返しのつかないところまで来てしまった。

そもそも、妻がいないこんな時間に、連絡も入れずに女性を家にあげる彼も彼だ。食事を終えて、ソファに倒れるように寝転ぶ彼を見てそう思う。

まだ、やめられる。

今ならまだやめられるかもしれないと言うのに。

でも、少しだけ。

少しだけ、彼の手に触れるだけならまだ、きつと大丈夫。

そうしてゆっくり彼の手に触れる。ゴツゴツとした大きな手は、ひどく無骨で。

そつとその手を頬に近づける。

硬くて柔らかくて、暖かい。これを毎日好きなようにできる親友のことを考えると、妬ましく感じてしまう。

「うっ……」

何かに反応したように、ケイはピクリと動く。

恐る恐る頬を突いてみるも、これ以上の反応は無かった。

彼の体をそつと撫でると、再び身を振らせる。その仕草が少しだけ可愛く感じられる。

もう、止められない。



「……バイन्द」

彼の両手足に拘束をかける。睡眠剤自体は少量であり、アルコールと掛け合わせた程度なので彼の眠りは特別に深いというわけではない。

うなされるような顔に、こちらも顔を近づけて、優しく口づけをする。

もう一度、もう一度。

そして、次は激しく。

ぐちゃぐちゃになっていた思考回路も、こうしていると自然と気にならなくなってくる。ただ委ねて仕舞えばいいのだ。そうすれば何も感じず、ただひたすらに楽になれる。

そうして私は服を脱ぎ払うと、彼の衣服も乱雑に取り払う。そしてもう一度口づけを。

すると、彼は少しだけ瞼を開いた。

「う………な、のは？」

ぼやけた瞳はまだこちらを捉えきれいでなくて、今ならまだ引き返せると分かっていたのに――

「違うよ、ケイ。フェイトだよ」

呼んだのは、彼の妻だった。

その親友の名前を聞いた瞬間、胸の中のズブズブとした黒い何かが溢れ出てきた。なのほも、私がケイに少しだけ気があることを知っていた。直接口に出して「スキ」と言ったわけではないが、幾たびかは相談もしたし、話もしたはずだ。

それなのに、どうして。どうして。

「ふえい、と、さん？　って、あれ俺、何やって」

少しずつ意識が覚醒していく彼の唇を、もう一度塞ぐ。

「んぐつ、つちよ、待って、待ってくださ——」

「ごめんね、待てないの。待てなかったの。だって、待ってるだけじゃ、もうダメだったから」

「そんな、何で」

「私のこと、嫌い？」

「いや、そんなことは、無い、です、けど」

私は本当にずるい。

彼なのだから、こういう風に返答してくるのは知っていたというのに。わざわざ口に出して言わせる。

だけれども、彼も彼でずるい。

いつもいつも、思わせぶりの態度をとって、必要以上に優しくして、甘えてしまう隙

を見せる。

だから、その隙に嫌という程入り込んで、内側から全部壊してやればいい。

誰かに愛されたいという欲求は、昔から満たされないうままだ。それは、周りの何かで補えても、ある人から愛されないままでは決して埋まることのない穴だ。

母親への家族愛、承認欲求。

多分、そんな昔に空いた穴が、もう埋まっていると勘違いしていたその隙間が今は形を変えて彼でなければ決して満たせないものへと変わっていた。

「とりあえず、やめよう。ダメです、こんな事したら。バインド、解いて。ここで引いてくれるなら何も無かったことにしますから」

「何も無かった事にだけは、出来ないの。したくないの」

口をついた言葉は、本心からの言葉。愛して欲しい。けど、愛してくれとは言わない。ただ、満たして欲しいのだ。何もなければ、決して満ちることはないから。

ケイの顔は、疑問と怒りと悲しみと、色々な感情がぐちゃぐちゃに混ざり合って、今にも泣き出しそうだ。

でも、剥き出しのそんな顔が、向けられる感情が、愛おしい。

「俺、なのはと仲直り出来なくなる。というか、フエイトさんもなのはと喧嘩しちゃいますよ、こんな事してたら」

「許して、とは言わない。私も許してもらわなくていいから」

「どういう事だよフェイトさん、つか、離してって、やめっ！」

もう一度、私の唇で強く口を塞ぐ。

「なのはには、黙っておく。でも、ケイもこんなことバレたらいやでしょ？ だから二人で、二人だけの秘密にするの」

これは脅迫だ。

お願いでも祈りでも何でもない。ただひたすらにずるくて、ケイの優しさにつけ込んだだけの脅迫。

彼はその言葉を聞くと、顔を苦しそうに歪めて、諦めたようにため息をつく。

「……嫌だよ。嫌だけど、なのはを傷つけるのも、なのはとフェイトさんの関係を壊すのは、もっと嫌です」

「肯定、ってことでいいのかな？」

彼はその問いに答えることは出来ない。

それは事実上の肯定であった。

「だけどね、ごめんねは言わない」

そう言って、私は彼との歪な関係を、始めてしまった。

フェイトさんがウチに来て、過ちを犯してしまった夏の終わりから少し経ったある日。

秋というにはいささか暑く、へばりつくように高い湿度が残暑との相乗して俺の苛立ちを膨れ上がらせる。

今日もまた、そんな嫌な日だ。

窓の外から見える空は、茜色から段々と黒色に移りゆく。ため息をひとつ付いて時計を見ると、七時の数分前を示していた。

なのはとは、未だに仲直りできないでいる。

もはや最近では、彼女の方から関係の修繕を求めてきている節もあるのだが、どうにも俺の中にある罪悪感がただひたすらにそれを許さない。

それもこれも、あの日あの時以来始まってしまった、フェイトさんとの歪な関係のせいだろう。

椅子に座りながらこの嫌な時間を、何かをするわけでもなくじつとしていると、待つてもいなかったインターホンの甲高い音が空っぽな部屋の中に反芻して鳴り響いた。じとりと重い汗が頬を流れる。鉛でもつけられたように動こうとしない足を無理にでも動かし、通話のボタンを押す。

液晶にはもちろん、フェイトさんの姿だ。

「……はい」

「おじやまするね」

恥ずかしそうに頬を染め、照れを隠すように指先で髪の毛の先をいじる姿は可愛らしくもあり、恐ろしさも少しだけ孕んでいた。

「鍵は空いてるので、どうぞご自由に入ってください。入った後はちゃんと——」

「わかってるよ、ちゃんと、鍵を閉めておいてください、だよな？」

重ねるように言うフェイトさんの声で、俺の言葉は居場所をなくし口を半開きにしたままどこかに雲散する。

消えていく言葉を拾い集めようとして、なんとか口を動かそうとするも、それが言語化されることはなかった。いや、そもそもこれ以上喋りたいことなんて無かっただけなのかもしれない。

ドアの軋む音が近くて、紛れもなくこれが現実なのだと感じさせられる。

インターホンの繋ぐ目に見えない距離は、音とともに搦めとるように縮んでいた。

近づく足音になすすべもなく、ただじつと待っている。少し前であればお茶でも出してもてなしていたのに。今はそんなことをする気力も起きない。

ただ、俺は一つのことを祈るように思い続ける。

高町なのはにだけは、何があってもバレてはいけなないと。

どうせいつかはダメになると知っていても。

どうしようもなくその場しのぎで問題を後回しにしている。

俺と彼女の関係も、彼女と彼女の関係も、その全てがきつと壊れてしまうから。

それだけはどうしても避けたいから。

俺はこの関係を、甘んじて受け入れていた。

なのは俺が居合わせずに、フェイトさんと俺のスケジュールが合う日。

その日は、何を隠すこともない。

浮気の日となった。

例の日、フェイトさんにクスリを盛られて無理やりに迫られたあの日以降、俺はなのはに知られる事だけをただ恐れて最低な肉体関係を続けていた。

「あの、フェイトさん」

「なーに？」

甘えるような猫撫で声でフェイトさんはこちらを見る。

「どうして、こんな事したんですか」

俺は自宅のベッドに他人行儀に座りながら、うちのベッドに異様に馴染み寝転ぶフェイトさんに目を向けた。ホテルのベッドに入っている時よりも、俺の家のベッドに入っ

ている時の方が、嬉しそうに、ずるそうに笑っている。

「こんな事、って」

「わかってて、言ってるんですか」

とぼけたように笑うフェイトさんに、憤りを感じながら少しだけ怒りを露わにして強く口に出してしまおう。

「……ごめんね」

「そう言う事じゃなくて」

「そうじゃなくて、ケイを怒らせてごめんねって事。私は、この関係に対して謝るつもりなんてさらさら無いから」

先程までとは打って変わり、強くまっすぐな声でフェイトさんは言い放つ。ベッドについた右手に温もりを感じると、その手はフェイトさんの両手に強く握られていた。

「なのはも、ケイも、もちろん私も。みんなずるいんだよ。だから、仕方がなかった」  
仕方がなかった。

俺自身の言い訳であるからこそ、嫌なくらいに胸の奥にすつと馴染む。

その言葉は俺を責めるようでいて、どこまでも甘やかすようで。ずるいと知りながらも、自分のずるさに気づかないフリをしていられないと思わされて、酷く苛立つ。

俺は、フェイトさんに襲われて以降、半ば脅される形でこの関係を続けていた。



なのは知られる事だけは避けたかったからだ。なのは知られて、幻滅されることが嫌だった。そして、なのはが知って、フェイトさんとまで仲違いすることは嫌だった。これが一つめの理由。

そしてもう一つが、俺のずるいところだ。

俺は、2年とちよつと前まで、フェイトさんの事が好きだった。それも仕方がないだろう。憧れてた人が、自分に良くしてくれていたのだ。そりゃ好きにもなる。

それに、これほどの美女ときた。だから、ただ単純に、オスという生物として、彼女とする行為がたまらなく背德的で、耽美で、愉悦を感じられるのだ。

ずるいと言うか、ただ最低なだけだな。

「そろそろ、なのはも帰ってくるかもしれないし、片付けもしたので……」

「わかった、シャワーだけ借りるね」

「どうぞご自由」

フェイトさんは身に何も纏わないまま、乱雑に脱ぎ捨てられた衣服を取ると、気恥ずかしそうに風呂場へと向かった。

こんな関係でなきや、本当に可愛いのに。

どうすれば、正解なんだろう。

俯きながら自己嫌悪に囚われていると、パタパタと足音が再び近づいてくる。

見上げる隙もなく、フェイトさんは顔を近づけてくる。そして最後に、俺の首筋に吸い付くようなキスをした。長く、強く、まるで自身の存在を証明しているかのように。

## なのはと喧嘩中にフェイトそんなにNTRれる話 3

今日は久しぶりになのはとの二人きりでの夕飯だ。

数時間前まで家にいたフェイトさんをなんとか帰し、ようやく晩御飯の支度に取りかかれた。料理の一番のスパイスは愛情だとよく言われるのに、こうして晴れない心のまま作ったご飯は、果たして美味しいのだろうか。

なのはに、全てを話してしまいたい。なにもかも、全部。

それでも俺は、行動に移すことなど出来ない。その理由なんて、一言では表せない。彼女に嫌われたく無い、そう言った自己保身であったり、彼女達の仲を引き裂いてしまうことが怖かったりと。

いつも自分に言い聞かせるように言い訳ばかりしている。

時計に目を向ける。

短い針も長い針も、どちらもほとんど真下を向いている。そろそろ帰ってくる時間だろう。秒針の刻むリズムは、心臓の鼓動よりも遅くて、1秒1秒が恐ろしいくらいに長く感じる。何度も時計に目を向けても、やはり時間はそんなにたっていない。だと言うのに、どうしても落ち着くことができずに、縫り付くように時計に目を向ける。

何度時計を見たかわからなくなってきたころ、ようやくついに彼女が帰ってきた。待っていたような、待っていないなかったような、どちらが答えだったのか俺自身でも分かりはしない。

ドアの軋む音が馴染み深くて、紛れもなくなのはが帰宅したのだと実感させられる。俺は近づく足音になすすべもなく、ただじっと待っている。いつも通り、普通に「おかえり」と言えるだろうか。

リビングのドアノブが傾いて、優しい音を立てる。

「……おかえり」

「……ただいま」

お互いに気まずさを感じたせいか、ぎこちなさを残しながら言葉が出てくる。

とは言え、なのはの表情から不機嫌であるようにはあまり感じられず、純粹に喧嘩後の微妙な距離感に戸惑っているようだった。

「ヴィヴィオは？」

仕事終わりに疲れた体を伸ばしながらキッチンへ向かう。いつもと同じコーヒードも飲むのだろう。

「ナカジマさん家で友達と一緒にご飯を食べてくるから遅くなるって」

「そういえばそうか」

続かない会話と微妙な沈黙に落ち着くことができな。手持ち無沙汰のままキツチンにいるのは目をやると、棚を漁っていた。

「……あー、コーヒー切れちゃってたから買った」

「そうだったんだ、ありがとう」

「いつもの棚じゃなくて、多分足元のビニールにまだ入れっぱなしだった気がする」

「本当だ、あったよ」

「そっか」

そうしてやってくるのは、再びの沈黙だ。

思考の海に潜り、何とか会話のネタを引き上げようとするもどうにもうまく出てこない。

やはり、話してしまうべきなのか。

何度自分に問うてみても、答えや結論はいつまでも出ないままだ。失うものが多すぎる。その代償を払う覚悟ができていない。

コーヒーメーカーがたてる、あぶくの弾ける音だけが部屋に響いている。鈍く、ほんの少しかん高くグラスが擦れたのが聞こえると、夏のしつこい暑さと行き詰まったこの空気をさっぱりさせるかのように冷蔵庫の製氷機をガラガラとかき回す音が聞こえる。

ちようどピッタリ2個分のグラスに氷が入れられるのもついでに聞こえて、タイミン

グを見計ったかのようにコーヒーマーカーはピピピと、鳥のさえずりを思わせるような音を立てて完成を迎えた。

沈黙、

俺の分まで入れてくれたのか、とか、完成したコーヒーを注がないのか、とか。

目の前のそんな細かいことに思考回路は支配されていたケイは、カウンタキッチン越しに覗き込む。  
目が合って、

そして再び沈黙、

必要以上に強く握られたグラスは、なのはの手の熱で温められ始めて、中の氷が一つ溶け始めている。カラン、と溶けた氷にバランスを崩されて静寂を突き破り、おそらく、それが口を開きかねていたなのはの背を押した。

「ごめんなさい」

完全に虚をつかれた。

「意地を張って、ごめんなさい」

ちゃんと、頭も下げて。

こんな風に、大真面目に誰かに謝られた事なんていつぶりだろう。まったく、なんだ。こんな簡単なことで喧嘩は終わるといえるのか。自分でもよくわからないというのに、

何ヶ月も何ヶ月も重りでも背負っていたように感じられていたのに、ケイは不思議とあつという間に軽くなっていた心で、そんなことを考えた。

だから、椅子を引いて立ち上がる。

ゆつくりと、確かに、堂々と。

それでいて、ここ何ヶ月ぶりに軽々しい足取りで。

なのはな双眸をしっかりと見つめて、一息。

「ごめんなさい」

一呼吸。

「意地を張って、しかも、先に謝らせて、本当にごめん」

ああ、簡単なことだったんだ。

何度も何度も深く考えてたはずなのに、全部が無駄でアホらしかったんだ。彼女は、

何で眩しいんだ。

ーもう、決心はついた。

俺は、全てを話すんだ。

頭を下げながら、ぐちゃぐちゃになった思考回路が、ゆつくりと解かれていくのを感じる。

こんなにも心優しい彼女を、大好きな彼女を裏切るような真似した自分を、許してく

れだとは思はないし言うつもりもない。

それでも、これ以上そんな事はできない。彼女に対してこんなにも不誠実な真似を続ける事はできない。

なのはとの関係も、フェイトさんとの関係も。

どうなるんだろうか、今でもわからない。

でも、きつと、今ここで全てをさらけ出して、ちゃんと謝れば。フェイトさんも呼んで、なのはと、ちゃんとお話をすれば。

優しくて正義感が強くて真つ直ぐで負けず嫌いで、だけれども誰より仲間思いな自分の妻も。

純粹で真面目で少し頭が固いけど、誰よりも失う痛みを知っていて心優しい彼女なら。

きつと分かってくれる。

だから、全部さらけ出して、もう、ただひたすらに謝ろう。また3人で、楽しく笑うために。

これから全てを話すつもりだというのに、驚くほどに心が軽い。軽くなった頭の中のせいかな、下げた頭も軽く感じる。

今までのことを全部話して、これからの事についても全部話し合おう。



そう強く、心に決めて頭をあげる。

「なのは、俺、どうしても言わなきゃいけないことが——」

けれども、俺の予想に反して、壊れそうなくらいに、ひどく顔を歪めた高町なのはがそこに居た。

「なのは？」

呆然としている彼女に声をかける。

しかし返事は返ってこない。

「どうした、なんか、俺まづいこと言ってた？」

もう一度、声をかける。

それでも返事は返ってこない。

これでは、彼女に全てを打ち明けられないではないか。予想だにしていなかった展開に、ケイは困惑の表情を見せる。

「どうし——、ええ？」

さらにもう一度、なのはに声をかけようと顔を覗き込む。

なのはの瞳は、比喻ではなくゆつくりと輝くと、その頬に一筋の涙が流れ落ちた。

その涙に、もう一度困惑する。

「う……けい、く、ん」

「ど、どうしたんだよ、なのは、急に。本当に大丈夫か？」

原因はわからないものの心配の気持ちは体を突き動かして、どうする訳でもなくなのはの方に手を伸ばす。

が、その手は遙か下の方に追いやられた。

「え？」

一瞬遅れて気がつく。

俺の手は、俺の意思で届かなかった訳ではない。ただその右手の甲に残るひりひりとひた痛みと、じんわりと出てくる赤みが、否が応でも伝えてくるのだ。

右手が、なのはの強い拒絶の意思によってはたき落とされたという事実を。

「なん」

「あ、そ、その、けいくん、首の」

「首？」

なのはは震える声を絞り出しながら、同じくらいかそれ以上に震える指でこちらの首元を指す。

なんのことだかわからずに、その首をはたき落とされた右手でなぞる。が、やはりそ

ここにはなんの感触もない。

「それって、だって、なんで」

なのはは要領を得ない単語だけを無意味に呟くと、突然足腰の力が抜けたのか、がくりと床に崩れ落ちた。

首、俺の首に一体何があるのだろうか。

彼女がこれほど落ち込むような原因なんて、無いだろう。そもそも彼女が帰ってくるまでは俺はこの家から一步も出ていないし、何ならフェイトさんが帰ってからは何もしていない——

「くび、って、あれ、フェイト、さん？」

サツと血の気が引くのを感じる。ケイは大慌てになりながら洗面所へと向かい鏡を覗き込む。先程までさすっていた、右の首筋。

そこには、くつきりと、まるで自分の存在を刻み付けるかのように。

フェイト・T・ハラオウンのキスマークが、赤紫色の刻印が、強かに、そして艶麗に刻まれていた。

## なのはと喧嘩中にフェイトそんにNTRれる話 4

黒くぼやけた赤紫色の証明を、信じられないと言わんばかりの表情で鏡に映る人物は指でなぞる。

頭の中が真っ白になった。

彼女の優しさに触れ、自分の愚かしさを認め、すべてをさらけだして、償おうとしたその矢先に。なにもかもが崩れ落ちてゆく。思い切り頭を叩かれたとか、そんな衝撃ですら比にならない。深くえぐるような、脳の中までかき混ぜるような、そんな感覚。

いまだに現実を認めようとしないうちは、脳信号を無視して呆然と立ち尽くしている。リビングから聞こえてくるなのはの嗚咽だけが、妙にリアルに聞こえて、心を激しく責め立てる。

現実と非現実のはざまにでも存在するような気になって、ただこの事実から逃げようとしていたことだけを気付かされる。

だが、もう逃げられない。逃げ場などない。

一度打ち立てられた覚悟は、括った腹は、とつくのとうにぶち壊されていて、だから今動いているのは大層な理由なんて無くて、できる事なんて無く、逃げ場を失った崖つ

ぷちに立つただの最低男の悪足掻きといったところだろう。

夏だと言うのに冷たい床の上を歩く。もう己の足には血なんて通ってなくて、感覚なんてほとんどなくなっていた。

逃げ出したばかりのリビングに再度戻る。

見慣れているはずの家なのに、一番心を落ち着かせることができる場所のはずなのに、今この瞬間だけは世界で一番居たくない場所になってしまった。

へたり込むなのは表情は窺えず、準備をしていなかった第一声は音として口から溢れることない。

歩みを止めて、まっさらな頭の中にちぐはぐに散りばめられている言葉をかき集めていると、変わらずに俯いたままなのははそつと、これ以上少しでも扱えば壊れてしまいそうな、ガラスの楽器のような声を紡ぎ出した。

「フェイトちゃん、だよね？」

「な——」

——んでそれを。

「当たり前だよツツ!!!」

音。

先程までの壊れそうな繊細な楽器から打って変わって、激しく、熾烈な音。

「おかしいなとは思ってたの。違和感がなかったわけじゃないの。でも、そんなこと絶対じゃないって、ふたりを、信じてたのに」

言葉が出ない。

いつもなら出てくるような屁理屈じみた言い訳とか、この状況をなんとか収めるような一言とか。

そんな上っ面だけの言葉を出したら、それこそ、本当に終わってしまおうから。

なんで、フェイトさんとの関係を察したのかだなんて、言わない。言えるわけがない。

「電話して」

「その、フェイトさん、に？」

「それ以外誰がいるの」

「あ、ああ」

この状況でどちらが悪いかなど明白だから、ケイは言われた通りに震える手で受話器を叩く。

そこに立ち尽くしたまま足は動かない。

目の前の彼女も床にだらりと座り込んだまま立ち上がることはない。

フェイトさんが電話に出ない可能性も、先ほど入れたコーヒーが冷めてしまったのではないかと言うことも、下ごしらえをした夕飯をどうするかも、そんなことすら頭に浮

かばない。

ワンコール、ツーコール。

無音の室内に高く反響する音は、本当に嫌なもので、鳴るたびに胃の奥が締め付けられる。

スリーコール、

ただ、運良くその電話は繋がる。

この瞬間にとつては、絶望的なものであったとしてもだ。

「もしもし、フエイトさん？」

横目になのはを見る。

が、まだ下を向いている。

聴覚の方に集中を戻す。

「ケイ！　どうかしたの？　そつちから電話くれるのつて、あんまりないのに」

今の状況、この雰囲気とはアンバランスに元氣よく電話に出た彼女。不倫関係になつて以降、決して俺から電話はしなかったためか、数年ぶりくらいにこちらからもらつた電話に声を弾ませる。

「あ、その……………、え、と」

考えもなしにただ流れに任せたままかけた電話。いったいなんて説明すれば良いの

かなんてわかるはずもない。一秒か二秒か、はたまたそれより長い時間か。うまく話せずに、嫌な時間だけが経過する。

そんな様子に、ついぞなのはは業を煮やしたのか、

「……かわって……電話、代わって」

受話器の向こうで、嬉々としているであろう彼女に聞こえるほどの大ききさで。おそらく意図的に、当て付けとして聞かせるために。怒りのこもっている声をお腹の底から絞り出す。

「あ——そういう電話なんだね。そう、やつと、やつと気がついたんだ。ふふ、遅いよ、遅すぎる。なのはもずーっと見て見ぬ振りしてたんだね」

無音の部屋だと、受話器から漏れる音はよく響いてしまう。

一瞬で全てを察し、電話越しに挑発の言葉を口にする。彼女もまた、なのはと同じように、聞こえているのを知った上で、意図的にやり返す。なのはにちょうど聞こえるような音量で。

「だって、結構前から、やってたよ。そういう事」

「待っててください、どういう事ですか、だってそれじゃあ、約束と違——」

「約束？ ……ああ、なのはには言わないで、って話だったね。大丈夫だよ、ケイ。決してなのはには言っていないよ。直接本人に、なんて事はしてないよ」



「でも、なら、見て見ぬ振りってどういう事ですか？」

「キスマークだつてつけたのはこれが初めてじゃ無い。ケイが気付かない様に、ベッドの下の方にわざわざ髪の毛も置いておいたし、寝室に私がいつも使つてる香水を軽くふつたり、数えたらきりが無いよ。」

「遅いよ——遅すぎるんだよ。気がつくのが。それとも、ケイも見て見ぬ振りしてきただけなのかな？」

「受話器は耳にびつたりとくつつけたまま、なのはに目を向ける。」

俯いていたはずの顔はあげられて、能面でも貼り付けられているような無表情でこちらを見つめていた。

「電話、代わって」

電話越しから聞こえてくるフェイトさんの声は聞こえず、ただゆっくりと立ち上がるなのはの姿を呆然と眺めていると、右手に握っていた受話器を強引に取られる。

「真つ直ぐ立っていることなど出来なくて、ふらふらした足取りでリビングのソファへと向かう。」

「フェイトちゃん、どういう事？」

数秒の返答、

話している内容が気になって少し足を止める。今度ばかりは俺にも受話器越しの声

は聞こえない。

「……そういう事じゃ無くて——、今、来れる？」

一言ほどの間、

「そう。なら、できるだけ早くね」

電話越しから漏れる語調の強い声。

なにを言われたのか、なのはは少しだけ顔を歪めて、

「そんなこと、電話越しで話したって——、だから、来てって言ったんだよ。ちゃんと話し合おう」

問答が終わったのを確認して、これ以上足腰に力を入れ続けることも同時に困難になって、無気力にソファに腰をかける。

完全な静寂。

無音の世界は嫌いではない。静かなところはとても好きだ。

それでも今は、この時は、互いの沈黙という元来静かであるはずのものが、ひどく煩く感じられた。

フェイトさんの到着は意外にも早いものだった。

待っている間の体感時間は途方も無いほどに長く感じたが、それを差し引いても、や

はりかなりの速さで来てくれたのだと思う。

それまでの間、なのはとの間に交わされた言葉は一切なく、事態が進展することもなかった。

無言のまま3人でテーブルにつく。

なのはも、フェイトさんも無言のまままで手元を眺めていた。

もう良い加減、自分でなんとかしなければならぬ。

フェイトさんと始まった関係も、結局自分が何もしない、何もできなかったから。なのはに首元のキスマークを見つけられたのも、最後の最後まで打ち明けられなかったから。

この現状は、当然のようにそのツケが回ってきているのだ。

だから、口を開いた。

嘘も偽りもなく、先ほど話そうとしていたことを洗いざらい吐き出してやる。

「なのは、すまなかつた。今回の件は全面的に俺が悪い」

ケイは体を右手側に座るなのはの方向に傾けると、先ほどより最寄り一段と深く頭を下げる。

「君の——君の望むようにする」

頭は下げたまま、なのはの返事を待つ。

どう罵られるのかなあ、などと自嘲気味に考える。しかし、次に口を開いたのは、予想とは異なりもう1人の彼女の方だった。

「ううん、ケイは悪く無いよ、悪いのは私だから」

ゆつくりと顔を上げてフェイトさんに目を向ける。しかし、目が合うことはない。彼女は来る前に用意しておいたホットのコーヒー優雅に傾けながら、その視線は、なのはに向けていた。

「……悪いとか、どうとか、そうじゃなくて。説明してよ、何があつたのか」

なのはは変わらせずに呆然としながら手元を眺めていた。決してフェイトさんと目を合わせるつもりがないようだ。

「なのはと、喧嘩してたときにフェイトさんが家によく来てくれてさ、その……相談に乗ってもらってたんだ」

「そう、だん？」

「どうやったたら、なのはと仲直り出来るかって話」

その言葉になのはは反応を見せた。

俯いていた顔を少しだけ上げ、首から上だけを動かして視線をこちらに向ける。

言いたくない。

どう説明すれば良いのか、わからない。

でも、言わなきゃいけないから。

「それで、その——」

「私が、この家に夕飯を作りに来たの」

言うべき言葉を手探りで探しながらもがいていると、フェイトさんが遮るようにして言葉を発した。それは暗に「私が話す」と伝えているようで、安堵しながら口を閉じて、そんな自分を不快に思う。

「それで、私はケイを襲った」

言い激む事もなく、あっさり口にする。

あまりにも堂々としているせいも、不意を突かれたのはもついで目線を上げてフェイトさんの方へと向けた。

「あとは、それを理由にケイのことを脅してその関係が続けていただけだよ」

フェイトさんは変わらずに、なのはへと視線を向けていた。

2人の視線がぶつかったのを感じて、何とか、せめて争いだけは避けねばと思ひ擁護の言葉を口にする。それが悪手かどうかも考えぬままに。

「それは違う、俺がただ断れなくて、フェイトさんにも、思わせぶりの態度を取ってただけで……、喧嘩中だったからって、俺が、甘えてただけで」

「フェイトちゃんの味方するの？」

すつ、と。向けられた視線に、口は動くのをやめた。

「だいたい、さっきの話とか聞けば、どう考えても悪いのはフェイトちゃんの方でしょ？」

どうしてケイクくんは擁護するの？ そもそも——」

「なのはだつて、私から盗ったよね」

突然、フェイトさんの悲痛な感情のこもる冷たい声が響く。

先程まで、堂々たる態度を取っていたとは思えないほどにその表情は悲しげで、儚げで、この関係が始まってしまった時のことを思い出してしまった。

「盗った、つて、どう言う——」

「覚えてるでしょ、3年前。相談したこと」

「——っ」

フェイトさんの声に、なのはは再び視線をそらす。

3年前、あれはまだフェイトさんの下で働いていた時だろうか。しかし、なぜその時フェイトさんがなのはにした相談とやらが今ここで話題に上がっているのだろうか。

「好きだつて、確かにその事は直接話してなかったけど、ずっと、気になってる人がいるつて話、したよね」

「——え」

もう、流石にここまで言われて気がつかないだなんて言うつもりは無かった。

2年と少しほど前の話、俺が憧憬を抱き、恋心を抱いていた彼女は。俺のことを、好いていたのだ。

「確かに、覚えてるよ。でもさ、おんなじ人を好きになったのに、フエイトちゃん、ケイくんと離れてから何もしてなかったよね、どうして、いまさら、今になって、こんな……こんなこと……」

なのははすすり泣き、また下を向く。

フエイトさんも、悲痛な面持ちを浮かべて俯いた。

「どうして、こんなにも最低な俺なんかを」

ケイはそれを口にする事なく心の中で何度も何度も言い放つ。

近づかなければ、付き合わなければ、出会わなければ、この2人の仲も、自分達との仲も崩れる事なんて無かったのに。

考えるのが遅い、といつも言われていた。

だから今もどれだけ考えたのかわからない。時計なんて見ていないが、手元のコーヒーはとつくに冷めている。

俺が、答えを出さなければ、この場は終わらないのだろう。

どんな答えを選んでも、きつと2人とも傷つける。もう、取り返しはつかないのだ。間に合う解は無くて、より良い解も恐らくない。どう転んでもハッピーエンドにはなり

得ない。

なのはの事が、好きだ。

だが、ここで答えを出して、もう一度俺とやり直したところでまた、彼女は幸せになれるのだろうか。たぶん、世間一般的には、彼女に謝り倒して、俺がしつかりと罰を受けて、それでも受け入れてくれると言うのなら彼女について行くと言う選択肢が正しいのだろう。ヴィヴィオの存在だつてある訳だ。だが、その選択で、彼女は、なのはは幸せになれるのか。俺には分からない。

それでも俺は、フェイトさんのことも、おそらく好きなのだ。

初めて本気で人を好きになったのは彼女だった。浮気という関係を続けた事は口でどう否定しようが、彼女に対して昔から好意を持っていたから、喧嘩中で沈んでいた自分を昔のように包んでくれたから、心の奥底では背徳的な喜悦を抱いていたからだ。フェイトさんを選ぶのは、きっと、世間的には間違えなのだろう。だが、彼女を選べば、俺もフェイトさんも、お互いに罰を受けられる。そうやって自分にも彼女にも甘えられる。魅惑な選択肢だ。

答えなんてすぐに出るはずも無かった。

だけど、どれだけ考えてもきつと出てくる物でもない。

まったく、本当に大した事情で妻のなのはと喧嘩をしてしまった。



故に、俺は。

ケイは、迷いながらも答えを出す。

なのはとの喧嘩中にフェイトさんにNTRれたこの話を、これまでとこれから、その全ての責任を取るために。

## なのはと喧嘩中にフェイトそんにNTRれる話 5—a

覚悟はできた。

自分のせいで作ってしまったこの状況を終わらせる覚悟を。

多分、これからどんな選択肢を選んでも、俺には二人を完璧な幸せに導くことなんてできやしないだろう。もう散々二人を傷つけているわけであるし、何より自分自身にここからより良い結末へ舵を取るほどの器量も無い。

それでも、最低な結末を出さなければならぬ。

これだって自分の罰の一つ、だろう。

完璧に冷えきったコーヒーに手を伸ばす。冷たい指先は震えていて、伸びている自分の手を見て「危なっかしい」と他人行儀に思うほどだ。

だけれど、それ以上に、口の中は乾ききっていつて。それだけじゃなくて、コーヒーを飲むという言い訳を作らないと、到底口が開いてくれる気もしなくて。

乾いている口の中と、緊張と、自分でもよくわからない黒く濁ったごちゃ混ぜの感情を、真っ黒なブラックコーヒーで全部喉の奥へと流しこんだ。

「都合がいいってことも、虫がいい話だってことも、わかってる」

堂々と話そうとしているのに、少しだけその声が揺れているように聞こえる。果たしてそれが、本当に声が揺れているのか、自分の心が、頭の中が揺れているせいなのかは、判断がつかない。

破られた静寂に、なのはとフェイトさんは視線をこちらに向ける。

二人の目を見つめる勇氣は無い。

——けど、覚悟ならある。

二人とも、不安そうで、今にも涙をこぼしそうで、弱々しく見えて。

強い二人が好きだった。

なのもフェイトさんも、二人とも凄く強くて、自分にとつての憧れであった。そんなにも強い二人を、ここまで傷つけた自分を、その事実をまざまざと知らしめられて、ひどく胸が痛む。

「それでも、それでもっ——」

ズキズキと痛む胸を無視する。

きつと、彼女たちの方がよっぽど胸を痛めているのだから。

俺は、答えを口にする。

「なのは、もう一度、俺とやり直してくれないか」

何度目かの静寂だ。

今はもう、時計の音も、空調の音も、ましてや自分の心臓の音すらも聞こえない。

「そして、本当に、虫の良い話だって事はわかってる。わかっているけど、また、みんなで仲良くなれる関係に戻れないか？ なのはと、フェイトさんが、喧嘩をしてる姿なんて、もう見たくない」

本当に、都合の良い回答だった。

なのはとよりを戻したい、二人の反目を見たくない、どちらも我儘で自分勝手な意見だ。

自分が嫌になる。でも、自分が嫌になっただけで構わない。これが、きつと俺にできる二人への償いなのだ。せめてもの贖罪なのだ。

先に口を開いたのは、フェイトさんだった。

「ごめん、ケイ。それは、出来ない」

当然だ、俺は思った。

フェイトさんにとって俺の回答は、最も最悪な結末の一つだろう。想い人に振られた上で、なおかつ寝取ろうとした相手と、その妻と、仲良くしろと言われてるのだ。だから、きつと彼女にとっては受け入れがたい答えなのだろうと思う。

「なのはの事も、好きだよ。でも、ケイの事も、好きなの。諦めて、2人に合わせる顔なんて無いよ。そもそも、そんなつもりなら最初からこんな事してない。もし、諦めると

しても、どんな顔してなのはに謝れば良いの？　どんな顔してケイに会えば良いの。どうすればいいの、どうすれば……っ……っ……」

フェイトさんは、その顔を美しく歪めた。そんな表情は、一度も見た事が無かった。美しく、綺麗だった。

それでも俺は、この自分勝手な、綺麗すぎる幻想を有り得ぬかもしない夢物語を押し通したい、押し通さなければならぬ。

だと言うのに。

「——もう、いいよ」

そう言い放ったのは、他の誰でもない、なのはだった。

その言葉に愕然とした。

どんな綺麗事や、どんな理屈を並べようと、心の奥底では「なのはなら許してくれる」という浅はかで、短絡的で、甘ったれた考えがあったのだ。

なのはは、憔悴しているくせに、憑物が落ちた顔を見せる。

「私、ケイさんと、フェイトちゃんが幸せになってくれるなら、それで良いよ。二人の幸せの助けになれるなら、それで、良い、よ」

先程までとは打って変わって、これ以上ない優しい笑みを浮かべていた。だというのに、彼女は痛々しいまでに涙を流していた。

「誰が悪いとか、さ、もう犯人探しはやめよう。ケイくんのは好きだけど、同じくらいフェイトちゃんも大事な親友なの。最初は、気持ちの整理なんてつかかなかつたけど、多分、きつとこれが一番綺麗な終わり方」

俺とフェイトさんは、彼女のその言葉にただただ圧倒されていた。何にも言い返すことが出来ず、呆然と見つめているだけだ。

なのははそう言い放つと、おもむろに立ち上がり、ドアの方へと歩み寄る。

出て行くのだろう、そんな事は分かっていたのに、この瞬間はそんな事実を否定したいとばかり思っていた。体は鉛をくくりつけられたかのように重く、動こうとしない。

「さようなら」

だけれどこれは現実だ。

そうして、彼女は家を駆け出た。

俺は突然の出来事に動揺した。しかし、今回ばかりはそうしてられない。ここでもし、彼女を追いかけなければ必ず取り返しのかからないことになるから。

彼女のあの言葉が、本心なのか強がりなのかわからない。分からないけれど、自分は、彼女と進む道を選んだのだ。

なんとか彼女に追いつくために、動かない体を、倒れそうになりながらも無理に起動

させすぐに立ち上がり家を飛び出そうとする。

追いついて、謝って、それから、先のことなんて何も考えていない。それでも今はきつと、行かなければならないのだ。

——しかし、それは叶わなかった。

「フエイト、さん？」

俺の服の袖は、縋り付くように、祈るように、フエイトさんに強く握られていた。

なのはが居なくなつたこの部屋は依然として薄暗く、妙な静けさだ。そんな中にポツンと取り残された二人は、部屋の真ん中で、時が止まつたかのように動きを止めていた。

「私、ズルいよね。本当に、ズルい」

服の袖は強く握られたせいか、くしゃくしゃになつている。フエイトさんは下を向いたまま顔を上げない。彼女の口からこぼれ落ちる言葉は、いったい誰に向けて放つた物なのか、俺には判断がつかなかった。

「……とりあえず、離して下さい。なのはを追いかけないと」

「なのはなら——、なのはなら、もしかしたら、こう言うかもって、心の中で思つてた」

その言葉に動こうとしていた足を一度止める。

「いつも自分より他人を優先する人だったから……その気持ちを利用して、本当に最低

だよね」

なんとなく、推測に過ぎないのだがフェイトさんの気持ちが分かった気がした。きつと彼女は、ついに耐えられなくなったのだ。

自分自身のために行った今回の行為、もしなのはが真つ向からぶつかって来てくれたなら、フェイトさんにとってはそれが良かったのだろう。

でも、なのはの選んだ答えは、自分を犠牲にしても、自分を裏切った二人を優先する物だった。

その答えに、フェイトさんは、ついで罪悪感を感じてしまったのだろう。後悔も謝罪もしない、そう言っていた彼女は、その発言のせいで自分を制約していて、溜まりに溜まった悔恨が胸中を支配しているのだろう。

フェイトさんは、嗚咽を漏らしながらその心情を吐露する。

「どうしよう、どうすれば、なのはは許してくれる?」

——どうすればケイは、私のこと許してくれるの?」

顔を上げ、縋り付くような目でこちらを見ている。

しかしその目には、俺は写っていなかった。

ああ、最悪な終わり方になってしまった。

もう、救いなんてないのだろう。今からどう取り繕おうと、どの道を進もうと、どん



な選択肢を選ぼうと、きつとそれらは意味を持たない。

全員が全員、自分の意見を押し通そうとしてしまったのだ。

俺は、なのはとの関係を戻して、二人が昔の関係になることを望んだ。

なのはは、自分を犠牲にして、俺とフェイトを幸せにしようとした。

フェイトさんは、ずるいやり方で俺との関係を続けようとした。

その全てが、過ちだと、誰も気がつく事は無かったのだ。

——いや、気がついていたとしても、それを選ぶしか無かったのだ。

俺の押し通そうとした意見では、フェイトさんを幸せにすることが出来ない。

なのはが最終的に通した意見では、俺を幸せにすることが出来ない。

フェイトさんの叶ってしまった意見では、なのはを幸せにすることが出来ない。

そして、それぞれの意見が自分を不幸にするのだ。

その全てが、最悪の形として叶ってしまったのだ。

「もう、間に合わない、よな」

もう、今更、追いつくことは叶わない。

出ていったなのはに、到底追いつく事はできない。今からこの家を駆け出て追いかけたところで間に合うはずもない。壊れてしまった3人のこの関係が、正常に動き出せるような回答なんてない。もう、間に合わないのだ。

フェイトさんは俺の袖を掴んだまま、無言で離さなかった。

俺はその手を振り解く事も出来ずに、無言で立ち尽くしているだけだった。

呆然としたまま、俺とフェイトさんは何かをするわけでも無くただ動けずにいた。

——だから、どちらからだったのかは覚えていない。快樂に身を委ねる事を選択したのは。ただお互いが、お互いの体を求めたのだ。

俺と身を重ねている時、フェイトさんは泣いていた。

しきりに誰かに謝っていた。

俺も、彼女との行為の最中はずっとなのはとの事について考えていた。楽しかった過去を、ただひたすらに追憶していた。もう、きつと、幸せな自分とは、幸せな彼女とは、この記憶の中でしか会えないのだから。

フェイトさんとの情交は、自傷行為に似ていた。

肉体的な快樂は、確実に双方にある。しかし、二人で交わっている時は、二人ともがその心を酷くすり減らすことが出来たのだ。故に、俺たちは行為を続けた。

許されないのは分かっているから。

もう、堕ちる事でしか、溺れる事でしか、俺たちは自分を保てなかったから。

|  
B  
A  
D  
  
E  
N  
D

# なのはと喧嘩中にフェイトそんにNTRれる話 5—b

「名前を呼んで」

彼女はそう言った。

付き合い始めた丁度の時の、告白が受理された直後のことだった。

記憶の残渣は、確かに微かなモノであるのだが、それでいて明瞭であった。

海鳴市臨海公園の澄んだ風はよく覚えていいる。

空にまでわたるのでは無いかと思えるほど広く輝く海は、彼女と同じように、すべてを受け入れてくれるかのようにだった。

人を名前前で呼ぶのは得意では無かった。

人との距離感には、人一倍敏感だったから。

故にその言葉は、今までの人生の中でも最も特別で、いつまでも心に鮮明に焼き付けられたのだ。

俺は、膝の上に固く握られた拳を緩める。

ゆつくりとその左手を上を持ち上げて、微かな冷たさを感じて、よくやく掌がじつと

りと濡れていたことに気がついた。今までの人生で、ここまで酷い手汗をかいたことは無かった、と益体もないことを考える。

鉛を括り付けたかのように重たい手は、予想に反していとも簡単に持ち上げることが出来た。そのまま、コーヒー以外には何も無いテーブルの上に音も立てずのせる。

静寂が続く中、唯一とも言える動きは、無音の動作といえど2人の視線の集中を受けるには十分だった。

最早、正常な判断を下す事も、誰もが認める正解に向かっても進める気はしなかった。俺が引き起こした事態だ。今更、都合の良い結末なんて望まない。そして求めない。

故に、最後まで独善的に、自分勝手に、幻想も持たせないように彼女達を裏切るのだ。俺の選ぶ道は、もしかしたら他の道があったのかもしれないが、この際はそれら全てを無視しよう。結末は変わるかもしれないが、結局どの結末になるのかは進んでみなければきつとわからない。

2人のため、とは最後まで言わない。

100%俺のためだと、言わせてもらおう。

眉間と双眸にぐつと力を入れて、精一杯の覚悟を身体中に示す。最後までどっちつかずの臆病者に、天は味方をしてくれるのだろうか。

俺は、左手の薬指に右手を近づける。

その時点で、もう2人は察したのだろう。悄然とした様子で、顔を真っ青に染める。そんな2人を見てしまうと、決意が揺らぐでは無いか。その表情を視界から外すために手元を見つめ直す。

もう一度自分の言い聞かせろ。この2人を傷つけるのは、これで最後だ。

自分の決断に体は中々言うことを聞いてくれなくて、揺動する右手の人差し指と親指は、左手の薬指につけられた指輪を捉えることができない。もう自分の指さえ見るのをやめることにした。

自分自身の目も、どこに向けていかわからない。だから強く目蓋を閉じる。当然視界は真っ暗になる。何も見えなくなつて、少しだけ気が楽になつた。

当初は無垢な色味であつたはずの、いつの間にか薄く濁つていた白銀の指輪。直接目を開いて見なくても、それがどんな見た目だつたのかはハッキリと想像ができる。それほど、大切なもの、だつた。

右手の指に金属特有の冷たさと、滑らかさを感じる。

そこには忘れられぬほどの思い出がある。

もはや付けている権利は無い。

もう一度、自分に言い聞かせろ。最後にだ。この2人を傷つけるのは、これで最後だ。俺は、彼女とのつながりを躊躇なく引き抜いた。

そこからは、簡単だった。

外した結婚指輪を机の上に置く。ことり、と普段の生活音がある部屋の中でなら聞こえないほどの小さい音は、それでも部屋に響いた。

2人の表情は、驚いているのは確かで、深くはわからなかった。

そして口を開くのにも、俺の中にあつた躊躇や恐れは消えていた。

「なのは、別れよう」

そのたつた十文字にも満たない言葉に、彼女は入り混じつた複雑な表情でこちらを見つめる。怒り、恨み、悲しみ、絶望。いや、こんな既定の言葉ではおそらく言い尽くせないほどの、彼女だけの感情。

だから、その唇が空気を震えさせる前に、その感情に声として音を乗せる前に、先んじて俺はもう一言を口にする。

「フェイトさん、あの関係を終わりにしましょう」

その言葉自体はきつと予想していなかったわけではないだろう。

2人から見れば、俺のその姿は裏切りにも見えるだろうし、自傷行為にも見えるだろうし、優しさゆえの行動にも、残虐極まりない行動にも見えるだろう。

何にせよ、彼女らにとって、その選択は俺の「逃げ」であることは確かだろう。

だが、違う。今から出す答えは、逃げるという行為以上に最低最悪な選択肢だ。

2人は口を動かして、何かを伝えようとする。しかし、決して言葉になることは何一つない。音の波は、届く事はない。

まるで宇宙空間か深い海の底のようだ。

いや、そもそも発していないのだから、ここは紛れもなく現実で、今起きている事実だ。

そうして俺は口を開く。

俺の出した誤答を、それでも彼女らに提示する。

「2人と、俺との関係を、出会う前に戻しましょう」

これは、「逃げ」ですらない。なかつたことにするのだ。

データのリセット。俺との関係の初期化。

最低最悪のエゴイズムだ。

「俺との関係は全てリセットして、昔のように、ただの他人に戻りましょう。自分勝手なのは分かっています、それに反さない償いなら何でもします。何でもやります。死ぬと言うなら今すぐにでも死にます。だから、だから——、最後に一つだけ我儘を聞いてください」

結局のところ、俺はこうするしかなかったのだ。

自分のことで精一杯になってしまった自分自身では、2人の感情はとつくのとうに分



からなくなっている。

思えば、最初から、俺は2人のことが好きだったのだ。

最低ながら、2人が、好きなのだ。

「俺のせいで、仲違いをする2人は見たくないんです。俺が求めるのは、ただそれだけなんです」

こうして心の内に抱えた泥のような本心の、ほんのひとかけらを吐き出す。全部が全部、自分の気持ちが変わるわけではない。それでも、本心の端くれでも吐き出す事はできた。気持ちが楽になった気がする。彼女達の悲痛な表情も、真っ直ぐ見つめられる。

そうして、改めて気付かされるのだ。やはり、俺のその解は俺のためのエゴであったことに。

自分自身を唯一の悪にして、悲劇のヒロインを演じるのは、最も簡単である。

私が悪いと涙を流して弱者になりきり「自分を犠牲に二人の関係を選んだ俺は偉い」と言い張りたいだけなのだ。

嫌になる。

嫌になるが、それでも関係のリセットこそが、最低の中の最高の終わり方なのでは無  
いだろうか。

それしか導き出すことができなかった。

「過程がなんにせよ、俺が二人を傷つけたのには変わりがない。だから、すべてを終わらせるにはそれしかないんだ」

なのはとフェイトさんは、俺のその言葉にただただ圧倒されていた。何にも言い返すことが出来ず、呆然と見つめているだけだ。

俺はおもむろに立ち上がり、ドアの方へと歩み寄る。

出て行くことくらい、彼女たちは分かっていたはずだ。分かっていたのに、きつとこの瞬間はそんな事実を、彼女たちは否定したいのだろう。

「……さようなら」

そう言って、彼女達との関係をリセットすることに決めた。

近頃は初秋といえど、蒸したてられるような暑さが残っていた。

日差しはいつも以上に照り付け、足元に広がる石畳から反射する熱気が余計にこの場

所を熱くさせている。真っ青な空はあたかも真夏の空のようであり、忘れるべきはずの、一月ほど前に自分が引き起こした事態を想起させられた。

辛うじてここが海沿いの道であるから、いやな暑さも、海から吹く少しだけ涼しい澄んだ風のおかげで耐えられそうだった。風音が高台のふちをなぞりながら半袖のポロシャツを揺らし、汗に湿った体表の温度を下げる。

この汗は暑さだけが原因ではない。

これから自分がすることに対しての緊張もその原因だ。

海鳴市はなのはが生まれ育った土地であり、心優しい彼女の家族が暮らすところでもある。

いくら俺が一方的に関係をリセットしようとしたところで、彼女たちだけでなく、その周りの人たちが納得することは決してないだろう。

だから今日は、彼女の家族に事の顛末を話して、その罰を受けに来た。

安直ではあるし、結局のところは自己満足にすぎないのかもしれないが、それでも傷つけてしまった人々には償わなければならぬと思う。

そのことは、なのはにもフェイトさんにも話していない。

関係をリセットするのだと言った手前、もう対面して会うことはできないし、自分自身に会うつもりがない。

海鳴市に来るにあたって、謝罪のついでではあるのだが、最後にここに訪れたかった。海沿いを道なりに進んでいくと、より開放的になった場所に出る。いつもであれば子連れのお母さんや学校帰りの小学生でにぎわっているはずの海鳴市臨海公園。残暑のせいだろうか、ほとんど人影が見当たらなかった。

ゆつくりと歩いて公園の方に向かうとやはりあの日のことを懐古してしまう。

彼女の名前を呼んだ、遠く消えた過去。

海の方にぼんやりと目を向けながら進む。境界線がどこにあるかもわからない海鳴市臨海公園に、たぶん、足を踏み入れた。

数年前から変わらぬ光景に、嬉しさと安堵を覚える。最後なのだから、綺麗な夢を見て終わらせて欲しかったのだ。

彼女と言葉を交わしたところまで、数十メートルに差し掛かった。

暑い中ゆつくりと歩いた体は、いまだに汗で湿っている。ポロシャツが張り付くのが、少しだけ不愉快に感じた。

「……あれ、って」

嫌な予感がした。

向かい側から歩いてくる人が、あの人に似ていたから。

なのはとの始まりの時ではない。今回起きた俺たちの話の始まりに似ていたから。

「……フェイト、さん」

こんな暑い中だというのに、もちろん汗もかいているのだろうけど、こうも綺麗に立っている姿を見ると、別世界のおとぎ話でも読んでいるような気分になる。いや、それは単に今の俺が目の前の現実を信じたくないだけなのかもしれない。

向こうもこちらに気がつたようだ。

だけれども、どうしてだろうか。引き返そうにも引き返せない。

俺は、両足が釘で地面に打ち付けられたかのように一步も動くことができなかった。

汗が背中を這う。

彼女は、それでもこちらに向けて歩みを進める。

海風がひとつ吹き、周りの木々は仰々しいざわめきを見せる。

近づくに連れて、遠目では想像できなかったほどに彼女が汗をかいていることに気がつく。

「ケイ、顔赤いけど大丈夫？」

心配そうに、気まずそうに彼女は口を開く。

もしかしたら、暑さでやられた俺が見た幻覚かもしれないという淡い希望は当然のごとく潰えた。

向かってくるフェイトさんは、その表情以外はまるで俺と彼女達の関係が壊れるきつ

かけとなった夏の昼下がりのようで、不思議と現実味がない。だからもしかしたら、幻覚なのかもしれない、そう思った。

だが、どうやらこれは、紛れもない現実のようだ。

俺が口を開きあぐねているのを見ると、いつもの通りの気が利く彼女は先に口を開いた。

「本当に、ケイだよね」

「あ、ああ」

「まさか、なのはの言う通りだ。本当にケイだ」

なのはの、言う通りだ？

その言葉に思考はフリーズする。

なのはは、俺がここに来る事を知っていたのか？

いや、違う。俺はこのことを彼女の家族に訪ねるということ時間くらいは話したものの、それ以外は誰にも話してないし、ましてやここに来ることをだれにも伝えてはいない。

でもだとしたらなんで。偶然？ にしてはできすぎている。

そして、その言い方だと、まるで彼女もここにいるかのような。

「それって、どう言う……」

「よかった、やつぱりここに来ると思ったんだ」

振り向く。

もう会うことはないだろうと勝手に思い込んでいた彼女の。もつとも聞きたくもあ  
り、もつとも聞きたくなかった声が後ろから聞こえたから。

「なん、で」

高町なのはがそこにいたから。

確かに、フェイトさんの言葉から、そうなることは予想できた。

けれど、だからといっていぎ目の前にしてみると頭の中は真っ白になる。

俺の言葉に眉の端を少しだけ下げて、困った表情を彼女は作る。

「……なんであって、それは」

間。

このまま、何も言わないで、静かで動かない時間が永遠に続いてしまえばいいのに。  
だけれど時間はいつもと変わらず誰よりも平等に流れて、汗が一筋流れて。

ざあ、と風が吹く。

「私にとって、フェイトちゃんにとって、そして、きみにとっても、大切な場所だから」  
堂々と立っている木々を揺らす程なのだから、この風は強いはずだ。

立ちくらみがあったのは、この風のせいだ。

「ここに来たら、ケイくんに会える気がしたんだけど、まさか本当に来るなんて、すごい偶然だよな」

彼女はいつものように軽快に笑う。

どうして彼女はそんな笑顔で笑えるんだ。

きつとその心には深い傷があるはずだ。俺たちがつけてしまった傷が。そして、俺に至っては、彼女よりも断然浅い傷しか負っていないというのに、笑顔一つ捻り出せやしないと言うのに。

きつと今の自分の顔を鏡で見たら、あきれ返ってしまおうだろう。

おそらく、それくらいに酷い顔をしている。

「いや、偶然って、だって、そんな」

言葉がうまく綺麗に出てこない。身振り手振りでも何かを伝えようとすることも、何を伝えたいのかも自分自身がよく理解していないのだから、到底伝わるはずもない。

それでもそんな様子の俺を、2人は優しい目で見ていた。

「……いまさら、あんな事して、許されないのは分かってる」

フェイトさんが口を開く。

俺は言葉を出せないでいた。

「それでも、ケイが例えこの関係をリセットすることを望んでいても、二人に謝らせて欲



しつ」

——どうして。

謝る気は無いと、明確に述べていた彼女が、今ここで、謝罪をしているのだ。

「本当に、ごめんなさい」

俺みたいに陳腐な言い訳を並べることもなくて、自己保身を望むわけでもなくて、見返りを求めているわけでもなくて、なのに、なんで。

「……あの後——ケイが出て行った後に、なのはとゆつくり、時間をかけて話したんだ」  
「だから」彼女はそう続けようとして、一度言葉を止める。

フェイトさんはなのはに目を向け、なのはは軽く一呼吸し、こちらをじっと見つめた。  
俺を待っていてくれたのだ。何もかも放り投げた俺を、答えを探している俺を。だから、せめて何かしなければと思い、今一度しっかりと顔を上げて、もう一度二人の目を見る。次に口を開いたのは、なのはだった。

「だから、もう一度、やり直そう」

「やり、直す?」

「そう、やり直す」

「やり直すって、何を」

やり直す。

一言で簡単に言えるものの、それが指し示す範囲は曖昧だ。

セーブをすることが出来ない現実世界において、やり直すなんて事は出来るはずもないし、やり直しを求めたところで、遡ると決めた場所が存在しなければならぬ。

この場合、彼女はどこからどうやり直す事を望んでいるのか。

「きみが無理してリセットを望んだから、だつたらそれでいいの。リセットさせてあげる」

俺が望んだのは、俺と彼女達が出会う前に戻す事。出会わなければ、きつとこんな事にはならなかつたから。だから、彼女が今許可を出したりリセットは、彼女達と出会う前という事だ。

「だから、今ここにいる私たちは、出会う前の私たちなの」

「……………え？」

「——だから、今また出会えたんだから、もう一度、みんなで友達からやり直すの」

俺が出したはずの答えは、たやすく彼女に上書きされた。

「リセットしたところから、出会う前のところから、最初からやり直すってこと、だよな」  
全てを無かつたことにするという俺の最低最悪の答えを、彼女達は、それすらも好意的に捉え直したのだ。

到底敵いつこ無い。そんなの、ありかよ。

そうして俺は気づかされる。最初から、二人の間には確執なんて無かったのだ。あったのは、俺と二人の關係にあつた歪さだった。

君はまた、俺に「始まり」をくれるのか。

「そう、ゼーンぶ最初からやり直すの」

俺の言つたりセツトは、彼女達と俺との關係を会う前のものに戻そうと言うものだ。だから、その先の人生で俺たちは無關係の人となり、もう2度と関わることはない、そう思っていた。

「でも、そんなこと、どうやってやればいいんだ」

それでも彼女達の出した答えは、俺のリセツトを受け入れた上で、もう一度1から出会つてやり直そうと言うのだ。

だけれど、そんな都合のいい話、あつていいはずがない。どれだけ自分に言い聞かせようと心の隙間と傷は埋まることもないだろうし、簡単にうまくやり直せるはずがない。

「無理だ、いまさら。そう簡単に消せるものじゃ無い。そんな簡単にやり直せると言うのなら、もつと他に道があつたはずだろ。でも、そんな道なかつたから、一縷の望みも無かつたから俺はあの結末を選んだんだよ」

自分自身に言い聞かせるように、弁を弄する。そして何より、俺の答えが、その行為

が、水泡に帰してしまうと言うのなら、それこそ、俺の全てを俺が許せなくなってしまう。う。

諦めて、勝手にバッドエンドに突っ込んでいって。まるで道化だ。最初から最後まで彼女達を不幸に導いているだけじゃ無いか。

だから、こんな結末、やり直すと言う最早ハッピーエンドですら無い代物を、俺が認めて良い訳が無いんだ。

「もう、どうしようもないんだ。もし、それで上手くいくとして、俺は何をすればいいんだ？ どうすれば、いいんだ？」

「簡単だよ」

「え？」

海から澄んだ風が吹き抜ける。

空にまでわたるのではないかと思えるほど広く輝く海は、彼女と同じように、すべてを受け入れてくれるかのようにだった。

彼女はそこにいた。

あの時と変わらぬ笑顔で、そこにいた。

「——名前を呼んで」

全てが崩れ去った。

自分自身の中に積み上げた自己保身の檻や、高層ビルのようにはるか高くそびえたつた虚勢や虚像も、全てだ。

名前を呼んで、それだけで、狷介に思えた俺の殻は崩れたのだ。何万字にも埋め尽くされた原稿よりも、流行のヒットチャートのポップでキャッチーな歌詞よりも、書き殴るほどの思いで溢れたどこぞの誰かのラブレターよりも、生真面目な政治家が掲げる本心のない美辞麗句なマニフェストよりも、何よりも強く、俺の中に轟いた。

何万字もなくもいいし、格好つけなくてもいい。それでも、なにより簡単に簡潔に、それでいてどんな文字よりも深く。

ついで、感情の昂りを抑え込むことができなくなる。胸にある感情が涙となって流れ出る。

その姿はあの時から、何も変わらないままで。きみが今回の、一番の被害者であるはずなのに。

未だ笑えない俺に向かって、あの日のように、笑いかけたのだ。

「ちゃんと私と、フェイトちゃん目の目を見て、はつきりと名前を呼ぶの」

だから彼女はこの答えを選んだのか。

俺のリセットという答えに對して。

全く、綺麗すぎるくらいに——完敗だ。

「……………な、のは」

そんな事を言われたら、名前を呼ばないなんて事はできない。

「うん」

「ごめん、本当に」

「うん」

「だからさ、本当はもう一回、友達から、一からやり直したいんだ。君の名前を呼んで、君に名前を呼んで欲しいんだ。本当は、そうして、やり直したかったんだ」

「——うん」

俺はあの時、リセットするだなんて言ってた。だけれど、本心は、ずっとずっと、ただやり直したかっただけなのだ。それでも、言うのが怖かった。認められない、認められるはずがないと思って、本音は自分でも気がつかないくらいに心の奥深くに沈みまわっていたのだ。

2人とまた、仲良くしたいだけだったんだ。

それだけが、本心だったんだ。

今更になって、遅いのはわかっているけど、やっと俺は自分の本心に出会った。壊れるのも否定されるのも怖くて、言い訳で自分を理論的に武装した気になっていた。壊れ

ただけれど、この強くて優しい彼女達となら、やり直せるかもしれない。

「フェイトさんも」

名前を呼ばれた彼女は、逸らすことなく視線をぶつけてくる。今の今まで逸らし続けてきたから、真っ直ぐに見つめられなかったから、今度こそはとぐつと堪えて怯まず受け止める。

日差しは全く変わらずに降り注いでいると言うのに、先程まで、嫌に感じていた熱さも、いつの間にか忘れていた。

「もう一度、一から、全部やり直して下さい」

言葉は選んだものでも考えたものでもない。並々に入ったカップの水が少しの刺激であふれ出るようにこぼれ出たものだった。

うん、と小さい言葉が聞こえてくると、彼女も同じように、溢れ出る感情を吐露する。  
「……ごめんね、ありがとう、ケイ、なのは」

フェイトさんは、俺が見た中で、今までで一番綺麗な笑顔を浮かべて、晴れた日にそぐわない、お天気雨のような涙を流すのだった。

たぶん、俺たち全員がずるかったのだ。誰もが人の優しさを信じずに、誰もが優しさを削ろうとしていたのだ。

俺と、もちろんフェイトさんは、これからも自分達の行った事については忘れてはいけないし、もちろん禍根を断ち切るのは、出来ないのかもしれない。

だとしても、皆がまた、仲良くしたいと望んでいるだけなのだ。その関係をリセットしてまでそう望むのだ。だったら、彼女達の望む事を、もう2度と俺は裏切らない。否、裏切つてはいけない。

「また一から、やり直しましょう。俺が言うのも、変だけど。俺と、なのはと、フェイトさんで、また、一から」

この日の海は一段と綺麗に見えた。残暑が猛威を振るう中、今この時だけは心地よく感じられた。

なのはとの喧嘩中にフェイトさんにNTRれたこの話は、もう終わりだ。

もちろん、やった事に対しての責任は取るし、償いはする。

それでも、三人でまた笑える最低限のエンドを目指して、また、一からやり直そう。俺は、出会った頃のあの日のように、最後にそつと、笑いかけた。